

抱樸 かわら版DX



【2020年度報告】

2021
vol.1

もくじ

ごあいさつ 01

事業紹介 02

 相談事業 03

 困窮者・ホームレス支援 04

 子ども・家族支援 06

 高齢福祉 07

 居住支援 08

 就労支援 10

 刑務所出所者への更生支援 10

 障がい福祉 11

 地域共生社会創造 12

 政策提言・周知活動 16

 希望のまちプロジェクト 17

 コロナ緊急支援事業 18

対談：高橋源一郎×奥田知志 19

会計報告 21

法人賛助会員 22

応援メッセージ 23

サポートのお願い 24

事業所一覧 25

抱樸の由来

「抱樸」とは、原木・荒木を抱きとめること。
抱樸は原木を抱き合う人々の家。
樸を抱く――「抱樸」こそが、
今日の世界が失いつつある「ホーム」を創ることとなる。
ホームを失ったあらゆる人々に今呼びかける。
「ここにホームがある。ここに抱樸がある」

ごあいさつ

抱樸とは、^{ほうぼく}原木（樸）をそのまま抱くことです。「断らない」。それが NPO 法人抱樸の使命（ミッション）です。

「二度と目が覚めませんようにと毎晩祈る」。これが路上の人々の現実です。そんな彼らに「生きることに意味がある」と語り続けてきました。「自立」は大事です。しかし、「生きること」に比べれば、それは「小事」に過ぎません。抱樸は「生きる意味のないのち」とされた人々が排除される時代に対する「対抗文化（カウンターカルチャー）」でありたいと思います。

1988年冬に始まった活動は、33年を迎えました。ホームレス状態から生活を取り戻された方は約3,600人以上となりました。しかし、「ホームレス支援」などあり得ません。「ホームレスという人」はいないからです。ひとりひとりがかけがえない「個人」でした。唯一無二の「名前のある個人」との出会いでした。

「人を属性や制度で見ない」活動は、現在27の事業に広がりました。「制度」は、専門性が高く必要不可欠です。一方で「制度」は対象者を限定し、「断る理由」となってきました。抱樸は「制度外」「制度の狭間」の人々に関わってきました。また、企業社会の縮小に伴い家族機能が低下した現在の社会において、家族が担ってきた役割を果たすことができるよう「赤の他人が引き受ける仕組み」を創ってきました。

抱樸は「家族機能の社会化」を担ってきたと言えます。今後「孤立化」が一層進む日本社会において、私たちの役割は残念ながら高まると思われます。「家族万能」という「家族幻想」の強い日本社会において、「制度と家族の間」を担いたいと思います。

このような「制度外の活動」が、30余年間停滞しなかったのは、多くの方々の応援（寄付）のおかげです。私たちは、今後も「出会いから看取りまで」という「人生支援」を続けていきます。どうぞ、応援ください。

抱樸は「誰ひとり取り残されない社会の創造」を目指します。

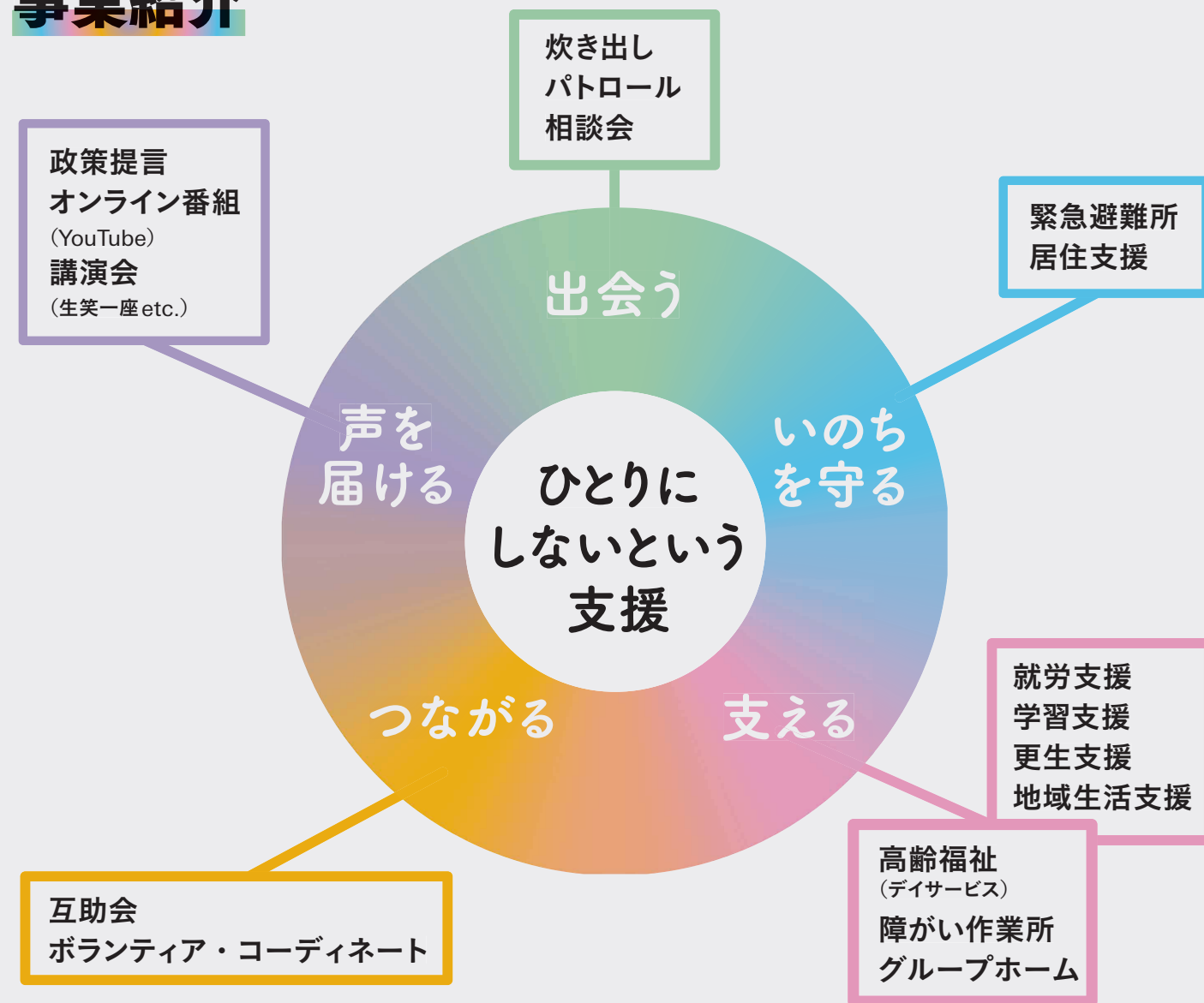
奥田知志

NPO 法人 抱樸 理事長 奥田知志（Tomoshi Okuda）

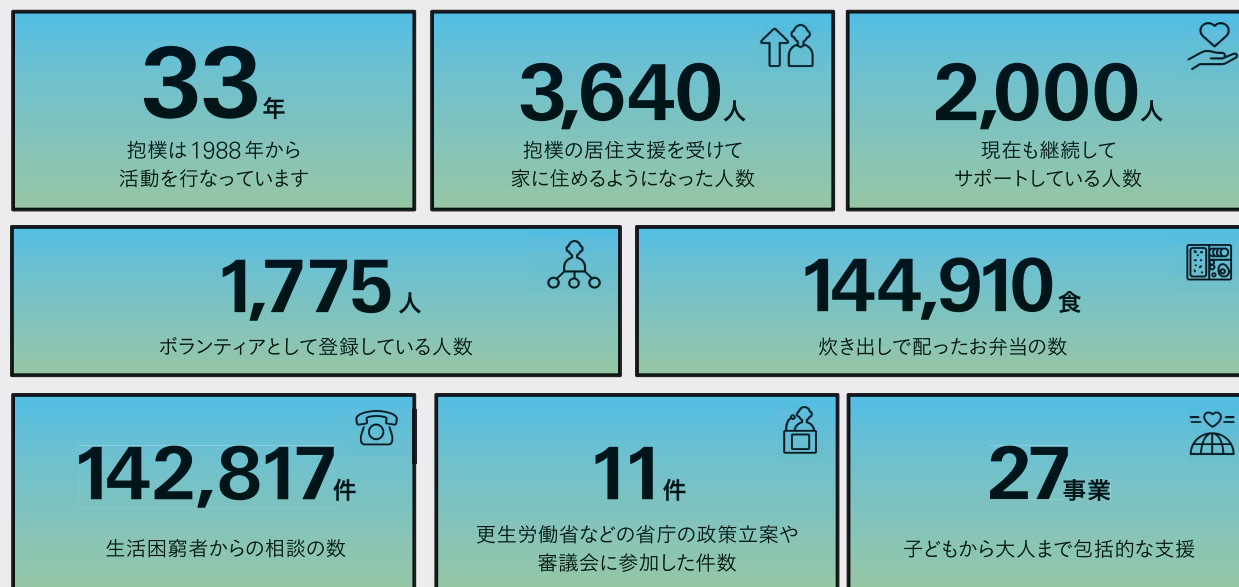


撮影：タカオカ邦彦

事業紹介



数字でわかる抱樸



相談事業



生活のお困りごとや心配など、まずはお話をお聞きします

ひとりで悩んでいてもなかなか先が見えない。そのようなときに相談できるところがあれば、次に進む勇気が持てたり、自身の気づかなかった可能性が見えてくることがあります。誰かに話を聞いてもらうだけでも違うものです。相談に来る方のお話やお気持ちを聞きながら、複雑に絡み合った困りごとを紐解きつつ、今後のことを一緒に考えます。

●中間市市民生活相談センター

生活に困っている方の相談事業として、中間市からの委託事業「市民生活相談センター」の運営を行っています。

*2020年度：相談件数 366件

*コロナにより相談が激増（2019年：162件）

●ホームレス自立支援センター北九州

・火曜相談会

ホームレス状態の方向けに、毎週火曜日に開催している相談会。決まった時間・決まった場所に相談できる先があることで助かる人が大勢います。

*2020年度：相談件数 88件

・法律相談会

ホームレス・困窮者支援に協力していただける弁護士・司法書士・社会保険労務士のグループ「法律家の会」メンバーが、毎月1回の法律相談会を開催しています。

スタッフの声：荒尾真央（巡回相談主任）

「相談に来る方のなかには、〈自分が何に困っているか〉がわからない方もいます。〈こうしたい〉という本人の要望はあっても、相談員からはそれが現状で最優先と思えないこともあります。丁寧に時間をかけてやりとりを続け、信頼関係をつくり、何から取りかかるか本人と一緒に見つけ、支援につなげていくことを心がけています」



困窮者・ホームレス支援



自立が孤立に終わらないために

社会に居場所がない。困っているのに、「助けて」と言える誰かがいない。生きること疲れ果て、自分が困っていることにさえ気づけない。私たちの周りには見えるところにも、そして見えないところにも多くの孤立と困窮があります。

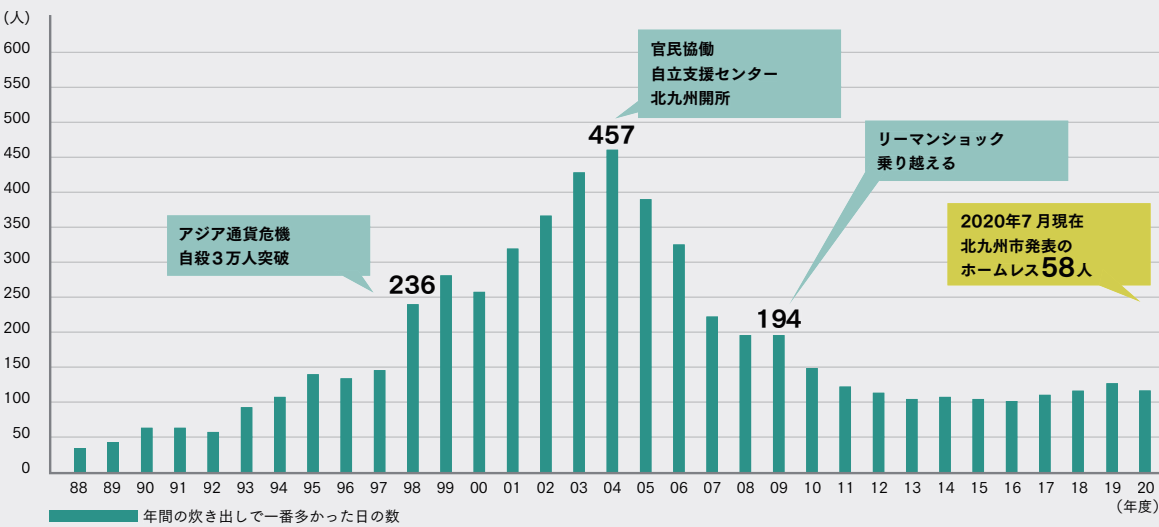
抱樸は社会から「自己責任」と言われ疎外されてしまった方々に寄り添い、次のステップへ進むための伴走を行なっています。それは、本人や家族ばかりに責任を求める社会の風潮のなかで、赤の他人も含めて「助けて」と言える社会をつくるための活動です。

●炊き出し・パトロール

北九州市小倉北区の勝山公園で、年間31回の炊き出しをしています。炊き出しの後、北九州市内・下関の7方面に分かれて、炊き出し会場に来られなかった方を訪ねるパトロールを行なっています。お渡しするお弁当は、炊き出し協力団体(※)のボランティアの皆様が準備したもので、お配りする衣類は全国から寄付で集まったものです。炊き出しはいのちを守る活動であり、「これからの相談」につながる出会いの場でもあります。

※炊き出し協力団体：カトリック黒崎教会、カトリック小倉教会、カトリック天神町協会、カトリック戸畑教会、カトリック水巻教会、カトリック湯川教会、カトリック若松教会、在日大韓基督教会、小倉教会、下関グループ、聖小崎ホーム、日本キリスト教団若松浜ノ町教会、日本バプテスト連盟、枝光キリスト教会、日本バプテスト連盟、小倉バプテスト教会、日本バプテスト連盟、東八幡キリスト教会、日本バプテスト連盟、若松バプテスト教会。

炊き出しで出会った人数の推移



※2020年4月～2021年3月 炊き出し回数31回のべ人数2787名（うち女性281名）平均87.1名／回

●ホームレス自立支援センター北九州

主に就職を目指す方の支援施設として、北九州市から「ホームレス自立支援センター北九州」の運営を委託されています。2004年9月にスタートし、これまでに1,000人を超える方が利用。ハローワークとの連携により、多くの方が仕事を見つけて施設を出発していきました。求職だけではなく、自動車免許などの資格取得も支援しています。



●自立支援住宅

2001年、北九州ではじめての自立支援の仕組みが自立支援住宅です。ホームレス状態からそのまま入居できる「家」を準備し、複数のボランティア担当者が伴走しながら、地域への出発を支えます。自立が孤立に終わってはだめだとの思いから、担当者とのつながりは入居者が自立支援住宅を出た後も続き、お見舞いや誕生日のお祝い、そして看取りまで行ないます。

※2001年5月以降のべ214名の方々が新しい生活へと出発しました。



●緊急シェルター抱樸館

路上生活は大変過酷で、いのちに関わります。路上生活をする方が減少している現在でも、年に数名は路上で逝去、または緊急搬送先の病院で治療が間に合わず亡くなるという現実がこの日本にあります。わたしたちは北九州市内にシェルターを準備し、緊急避難のための場所を確保しています。



ホームレスとハウスレスは違う

私たちは「ホームレス（社会的孤立）」と「ハウスレス（経済的困窮）」は異なる状況だと考えています。「この人には何が必要か？」と「この人には誰が必要か？」の両面を考えます。以前、中学生から襲撃を受けていたホームレスの方がこんなことを言っていました。「あの中学生は、家（ハウス）はあっても居場所（ホーム）、心配してくれる人がいない。心配してくれる人がいない者の気持ちは、俺は（ホームレスだから）わかるなあ」。その言葉で、私たちはハウスレスとホームレスは違う、ホームレスは路上生活者に限らないことに気づかされました。

子ども・家族支援



子どもの困窮は「家族の困窮」

相談を受ける中で、「幼少期に学校に行けなかった」「昔から家に居場所がなかった」という話をよく聞きます。子供時代の経験は、その後の人生を大きく左右するものです。しかし、「子どもの貧困」が7人に1人ともいわれ、貧困が親から子に連鎖している現在の状況では、親の責任を求めたところで問題は解決しません。

抱樸はこの困窮の連鎖を断ち切るため、2013年から子どものいる困窮世帯や社会的孤立状態にある世帯の支援事業を行っています。子どもへの学習支援を中心にしながら、その家族に対しても包括的かつ持続的な支援をしています。

学習支援

◎集合型学習「スイトレ」

2013年から、子どもたちへの学習支援をスタートさせました。学校や家庭の環境といったさまざまな事情により勉強したくてもできない状況に置かれてしまう子どもたちの学習支援を無料で行なっています。

集合型の学習支援「スイトレ」では、大学生や社会人のボランティアにも協力してもらいながら、宿題や受験勉強のお手伝いをしています。このスイトレは、多くの子たちにとって親や家族以外の大人と話せる場所、安心できる放課後の居場所にもなっています。



◎訪問型学習支援

さまざまな事情から集合型の学習支援に出てこれられないような子どもたちには、家庭訪問による学習支援も行なっています。訪問を続けていると、子どもだけでなく親との関係も作られていくので、家庭全体の生活支援につながることも多々あります。ママやパパから医療や体調、生活、学校、お仕事や医療、介護の悩みなどを聞き、私たちにできることはないか、一緒に考えます。なかには、引っ越しのお手伝いをすることもありました。

◎社会参加

子ども時代から色々な人や物事に触れることで、人生の選択肢が広がるのではないかな。子ども時代に「誰かから大切にされた」という経験を持つことで、自分のことを大切に思え、そして誰かのことも大切に思える人になるのではないかな…。そのようなことを考えながら、私たちは子どもたちが家庭や学校だけでない「社会」に触れるためのプログラムやレクリエーションも行なっています。一緒に釣りや海水浴に行ってみたり、クリスマスや夏祭りなど季節のイベントを行ったりもしています。



◎よるかふえ

安心できる居場所として「よるかふえ」を運営しています。写真は、生まれてから一度も誕生会をしてもらったことがない高校生のために、同学年の子の発案で開催した初めての誕生会。一方、勉強している子もいる雑居っぷり。これが、居場所「よるかふえ」です。

*コロナ感染防止対策で、2020年度は休止中



◎その他の生活支援

私たちの支援は学習だけに限りません。家族と学校との関係のご相談に乗ったり、必要があれば求職や医療、介護的な相談を受けたり、ただ話を聞いたり。そのようなつながりを持つなかで、子どもも親も幸せを感じられるように、お手伝いします。

また、子どもたちが成長しても、そこで支援が終わり、というわけではありません。大人になった彼・彼女らに対し、「困った時にいつでも助けを求められる場所」として残っていくためにも、少ないスタッフ数ではありますが奮闘の日々を送っています。



コロナのため、多くの事業が休止となりましたが、小学校・中学校の卒業式にはスタッフが参加。高校合格発表にも付き添い、喜びを共有しました。

*2020年度対象者人数 子ども97名とその家族

高齢福祉



支援は「出会い」から「看取り」まで

私たちは、出会いから看取りまでの支援をします。住み慣れた地域で安心してその人らしく生活できるように、介護事業も行なっています。

◎デイサービスセンター

デイサービスセンター（地域密着型通所介護）を運営し、高齢者の生活支援を行なっています。

【1日の流れ】

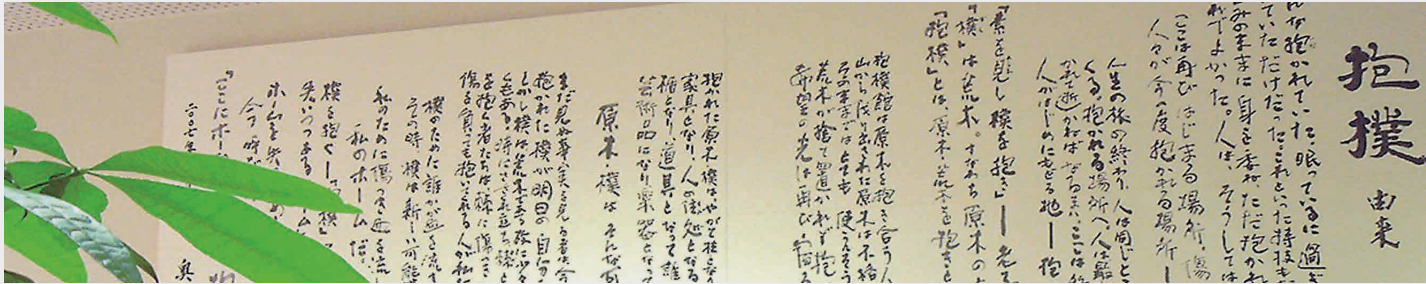
- 10:00 利用開始、バイタルチェック、入浴、アクティビティ、機能練習（体操など）
- 11:00 嚥下体操（飲み込み練習）
- 12:00 昼食
- 13:00 アクティビティ（塗り絵、トランプ、誕生日会など）、機能練習（体操など）
- 15:30 利用終了

*2020年度は14名の方が登録され、毎日7～9人の方が通っています。



利用者の皆さんが毎月、季節にあわせたテーマで作成している作品

居住支援



「家」から始まる生活の基盤づくり

住居を失うということは、第一に「生存的危機」、第二に「社会的危機」、そして第三に「孤立の危機」を意味します。住居を失い、路上生活になるという事態はすぐさま生命の危険を意味します。また、あらゆる行政手続は現住所地での手続き（申請）となります。住居を失うとすべての社会的手続きができなくなります。さらには、人は一定の場所に暮らすことで地域社会への参加の基礎を築きます。これらの意味で、住居を確保することは何よりも優先される課題（ハウジング・ファースト）であると言えます。

「居住支援」とは、建物（ハコ）を含む総合的概念であり、「子どもを育て、客を招き、社会活動を行ない、生活していくこと」を支えるものです。相談、住宅確保、保証人確保及び社会的手続き支援、生活支援、見守り支援、孤立防止と社会や地域への参加支援、葬儀を含む死後事務など、本人の生活（人生）全般にかかわる支援です。

●抱樸館北九州

「抱樸館北九州」は、多くの方々の寄付によって建てた入居施設です（2013年9月オープン）。路上生活を脱出し自立した人たちのなかには、障がいや金銭面などさまざまな生きづらさを抱えるために、どうしても地域生活に馴染めず、施設入所も難しい人たちがいます。そんな方たちを迎える場所が必要でした。

「ここは再びはじまる場所。傷つき、疲れた人々が今一度抱かれる場所」。1階にあるレストランには、「抱樸由来」と題した大きな額が掲げられています。

【施設概要】

- ・1階 レストラン、デイサービスセンター
- ・2～3階 完全個室の居住スペース（30室）、入浴施設
- ・24時間のスタッフ配置

*2020年度 入居者数27名（2021年3月）新入居6名 退去9名
2020年10月1日より、日常生活支援住居施設（※）に認定（北九州市認定）



※ 生活に困っている方向けに家賃を低く抑えた無料低額宿泊施設のうち、面積や耐震・耐火性能など一定基準を満たした施設に対して、行政が生活支援のためのスタッフ人件費を助成する制度が2020年10月1日から始まりました。抱樸は、制度開始当初からこの認定を受けています

●見守り支援付き住宅

（プラザ抱樸／グループホームほうぼく）

プラザ抱樸は、プラザ入居者間や地域の方が交流する「サロン」でもあります。今年度はコロナ禍で様子見をしていましたが、ボランティア部の協力のもと、クリスマスカフェを催しました。感染予防に注意しながら総勢28名が参加。抱樸としての居住支援のあり方をこれからも模索していきます。

2017年9月からスタートした見守り支援付き住宅は、単身生活が可能であるものの、なにかあった時のための見守りや時として生活支援が必要な方に対して、住まいと生活支援、家賃債務保証を組み合わせたサブリースによる「持続可能な居住提供」を実現するモデルです。

「空家を有効利用して生活基盤を整えること」と「継続的かつ効果的な自立支援を提供すること」を組み合わせ、仕組み化することで、自立のための息の長い支援が可能となります。

原則は賃貸借契約とし、一部にはグループホーム（共同生活援助）を組み込むことで、より支援ニーズの高い方にも対応しています。

【物件内容】

小倉北区（12階建てマンション）全室リフォーム済み、共同玄関オートロック、トイレ・浴室別



*2020年度入居者数 60世帯（2021年3月末）＋グループホーム11名（2021年3月末）

入居者の声

「支援付き住宅に入ってからには良いことばかりです。ここに入る前はきついことばかりでした。子どもを抱え、住所もない状態になっていました。これまでは、どうせ誰かに話しても、聞いてはくれない何もしてもらえなかったが、今はサポートしてもらえます。お金を計画的に使えるようサポートしてもらえたり、役所や手続き等わからないことは一緒にしてもらえます。いつでも相談できて本当にありがたいです」

片山沙保里（仮名）さん：2020年7月入居

●「自立支援居宅協力者の会」による入居マッチング

不動産事業者がNPOと連携し住居喪失者の居住支援を実施するための組織で、現在、福岡県内約50社の不動産事業者が加入しています。「自立支援居宅協力者の会」の加盟企業が賃貸物件を紹介してくれるおかげで、北九州の活動での住宅確保率は100%！

会の主な働きとして、①不動産物件の紹介、②入居後の見守り、③家賃滞納などの早期発見とNPOへの連絡、④退去や死去時の残置物処分などに関する協働を行ないます。

●賃貸借契約時の保証人の提供

私たちは「住みたい」と「貸したい」を橋渡しするために、賃貸借契約を結ぶ際に家賃債務保証を提供しています。提供するものは「保証」と「暮らしの安心」です。

さらには、債務保証会社による家賃債務保証と抱樸の生活支援を組み合わせた「断らない家賃保証」サービスの提供も開始しました。ビジネスを組み合わせ、いのちを支えます。

就労支援



仕事に向かうための土台づくり

私たちは「仕事」全般にかかわる支援に取り組んでいます。「仕事」の役割は稼ぐことだけでなく、生きがいであり、生きる手段のひとつです。

◎就労準備支援事業（中間市・北九州市受託）

すぐに仕事をすることが難しい方を仕事をしようとしている方の「生活全般」「社会とのつながり」「就職活動」の3つの面から支え、本人にあった仕事を一緒に探していきます。協力企業による就労体験から就職につながった研修生もいます。

*2020年度：研修生35名

◎技能講習（厚労省受託事業）

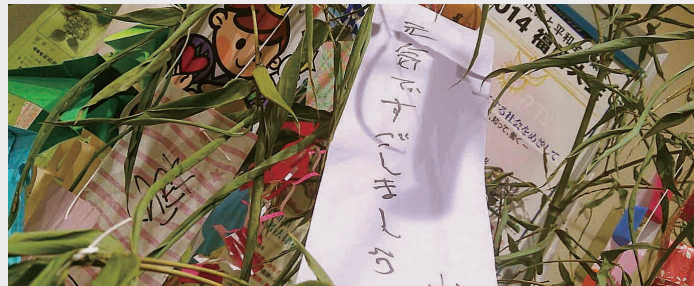
運転免許など免許の取得や技能の習得を支援することで、就職の可能性を広げるお手伝いをしています。

*2020年度：受講数154件

◎無料職業紹介

無料職業紹介事業所の許可を受けて、働き手を求める企業と働きたい人をマッチングさせる支援をしています。

刑務所出所者への更生支援



誰もがやりなおせる社会へ

炊き出しなどの現場で、「刑務所から出所した」という方の相談を受けることがあります。緊急連絡先や保証人、家が決まるまでの仮住まいなど、家族や知人の支援がないと刑務所から出所したあとに生活を再建することは困難です。抱樸は刑務所にしか居場所のない、孤立した方の支援にも取り組んでいます。

◎地域生活定着支援センター

高齢・障がいなどの困難により生活苦に陥り、犯罪に走ってしまう方がいます。たとえば、全国にある48ヶ所の地域生活定着支援センターには、高齢・障がいなどの課題を抱える方から、年間1,400件を超える支援依頼が来ています。より安心できる居場所と生活を得ることで、再び罪を犯すことのない人生を送ってもらう支援をするため、福岡県地域生活定着支援センター事業をしています。

◎再犯防止モデル事業

福岡県では、起訴猶予や執行猶予になった方のうち、高齢や障がいなど福祉的な支援を必要とする方に対して、適切な支援につなげるモデル事業が2019年よりスタートしました。検察などと連携することで、適切なサービスにつないでいきます。

*2020年度：新規相談23名（累計38名）

障がい福祉



生きづらさを抱えても役割のある生活を

抱樸は、就労継続支援B型と生活訓練の事業所を運営しています。

ホームレスや生活困窮状況に陥る方のなかには、さまざまな生きづらさを抱えている方がいます。そのひとつが障がいです。生きづらさがあっても役割を見出し、その人らしく生き生きと能力を発揮してもらいたい。障がいを持つ方の仕事づくり、生きがい、居場所づくりのために就労継続支援事業を行なっています。

多機能型事業所ほうぼく（抱樸）：2020年度登録者数30名（一日平均利用24名）

ほうぼく第2作業所：2020年度登録者数28名（平均利用18名）

【2020年度 作業内容】

- ・高齢者施設やマンションの清掃
- ・箱折りなどの施設内作業
- ・自動車部品の研磨・検品
- ・ウエス加工
- ・自主製品やお菓子の製造・販売
- ・農作業と収穫物を用いた製品づくり



小倉南区の農園を借りてさつまいもを作っています

ほうぼくストア

作業所でつくった「まごころ製品」を通販しています。

売上は利用者さんの工賃になります。ぜひご覧ください。

<https://npovol.stores.jp/>



手編みで作っているコースター



本のしおりにかわいいフェルトボール



地域共生社会創造



誰もが互いに助け合える仕組みを

私たちは、支援の専門性を高めると同時に、市民参加型の「社会づくり」を目指しています。地域の隣人としての見守りや助け合いが、「孤立」を生まないための何よりの力になるからです。出会いから看取りまで。「ホーム」を失った方たちとともに生き、支援／被支援の関係性を超え、「お互いさまの社会」を実現させるために、抱樸をプラットフォームにして、たくさんの「出会い」や「交流」の機会をつくりたいと願っています。

●地域生活支援（自立生活サポートセンター）

出会いから看取りまでの包括的なサポートを行なうため、地域での生活を再開した方々の見守り支援を行なっています。

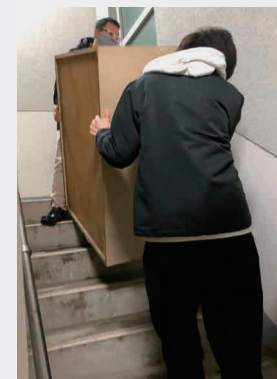


① 就労支援・定着支援

② 住居支援

③ 福祉事務所等との連携による支援

④ 健康・保健支援

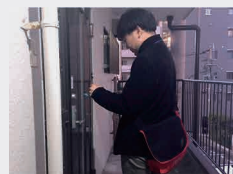


⑤ 親族・地域との交流支援

⑥ 福祉制度等活用による支援

⑦ 法律・人権支援その他

⑧ 定期訪問



安否確認訪問

⑨ 互助会連携

⑩ 看取り等支援

⑪ 金銭管理支援



葬儀の支援

＊2020年度実績：支援件数のべ22,902件 支援人数のべ7,436名

●ボランティア

抱樸にとって欠かせないのが、ボランティアの存在です。実際に、私たちの活動はすべて、ボランティアの発案から始まっています。また、地域共生社会を実現するうえでも、ボランティア活動への参加はとてまたと考えています。

ボランティアで行なう活動は各「委員会」が企画し、活動のコーディネートは、抱樸のなかに設置した「ボランティア事務局」が担当しています。（ボランティア活動にご興味のある方は、P24をご覧ください）

●委員会が主導する活動、3つの柱

・炊き出し

2020年度はコロナのため、レイアウトの変更や時間の短縮、食事スペースの撤去、星空カフェの中止などによって「交わりの時間」が減った代わりに、全国から寄せられたメッセージを当事者に手渡しする「炊き出しお手紙作戦」を大きく展開しました。

＊2020年4月～2021年3月 炊き出し回数31回 参加ボランティア総数2354名



・自立支援住宅

入居に関する面談、入居式、入居後の日常支援、自立支援プログラム、出発式などを行い、関係性を深めています。

2020年度は、コロナウイルス流行が長期化するなか、料理プログラムと思い出プログラムは開催したものの、食事は見送り、入居式および出発式は、食事なしの縮小開催となりました。

・自立後サポート

① お見舞いボランティア

施設や病院におられる方々を定期訪問するボランティア活動。2020年度はコロナ影響で活動が止まりましたが、対象者のべ25名の方々へクリスマスカードの寄せ書きも送りました。

② カードづくり

バースディカードとお見舞いカードを毎月つくってます。2020年度はのべ811通を発送しました。

③ なごみカフェ運営

抱樸館北九州のレストランで毎週開催のカフェ運営。コロナ影響でボランティア参加者数が、「2019年度：201名」から「2020年度：112名」に（2020年4～6月、2021年2～3月はカフェ休止）。

④ お花を飾ろうプロジェクト

ボランティア講師をお招きして、季節のお花を使ったフラワーアレンジメントを作成し、抱樸館北九州に飾りました。



①



②



④

⑤ 書き方教室

ボランティア講師に硬筆のさまざまなお手本と筆記用具をご用意いただき、参加者一人ひとりに合ったお手本で、練習・添削をしていただきました。

⑥ 声かけのための訪問月間

担当ボランティアが抱樸館入居者のもとを訪ねる「一斉訪問」。2020年度はコロナ対策として10月を「訪問月間」と定め、人数を分散して訪ねる形にしました。入居者と一緒に「コロナが終息したら、なにしたい？」を考え、掲示する企画も行ないました。

⑦ 冥土の土産（思い出づくり）プロジェクト

身寄りのない方の「行きたい場所がある」「やってみたくことがある」といった、ご希望を叶えていく企画。2020年度は、Yさんの誕生日にあわせて、動物園へ外出。大好きなお酒も少し飲んで、楽しいひと時を過ごしました。

＊コロナ禍のもと2020年度は、思うように交流できない苦しい1年でしたが、年度末には、インターネット配信も活用した「おんなじいのちコンサート」も企画。リモートで遠くの方々ともつながりの輪を広げることができました。

◎互助会

月500円の会費で、誰でも参加可能な互助グループです。
出発点となったのは、路上から自立した後、再びひとりぼっちにならないように、そして人生の終わりにはみんなで看取り・送りたいと考えた、自立者のみなさんがつくった「なかまの会」です。助けられたり、助けたり——そんなつながりが地域に広がればと、「なかまの会」を土台に、「互助会」ができました。
互助会は「人はひとりでは生きられない」を基本に、3つの精神を大切に活動しています。



- ①「なかま」——仲間をつくる、仲間になる
- ②「お互いさま」——助けられたり助けたり
- ③「ふるさと」——助けて、と言える居場所をつくる

互助会は「共に生きる地域社会の創造」を行なうための事業であり、地域に開かれた大きな家（ホーム）です。誰もが「なかま」。いつでも、どなたでも歓迎します。
※互助会のなかには、野宿の経験を分かち合える当事者グループ「なかまの会」もあります。

【活動内容】

① 互助会レター

行事カレンダーやその月に誕生日がある会員の紹介など、会員交流のための「互助会レター」を毎月発行しています。安否確認もかねて、一人暮らしの方には、なるべく手渡しでお届けしています。遠方の方には郵送でお届けします。



①

② イベント

なごみカフェでのプチバザーや、卓球・カラオケ・囲碁・将棋といったレクリエーションなど、定期的な集いを開いています。季節毎のレクリエーションとして、お花見、そうめん流し、バスハイク、地区懇談会なども企画しています。2020年度はほとんどのイベントが中止となり、電話を使った声かけなどを模索しました。



③

③ 誕生日会

毎月抱樸館北九州にて行なっています。
2020年度は6回実施し、合計240名（1回平均40名）が参加しました。
※2020年4～6月、2021年1～3月はコロナの影響で中止

④ 炊き出しのための衣類物資仕分け作業と地域清掃

毎週金曜日に八幡東区の倉庫に集合して実施しています。
※2020年度：37回実施（1回平均8.0名参加）

⑤ お祝い金・お見舞金

長寿やご結婚のお祝い、また入院お見舞いも出しています。
金額はささやかでも、その方のことをみんなで思います。
※2020年度 卒寿（90歳）1名、米寿（88歳）4名、傘寿（80歳）7名、喜寿（77歳）5名、古希（70歳）9名



⑤

⑥ 互助会葬

「なかまの会」の会員が亡くなられたとき、互助会のみんなで葬儀を執り行ないます。だれが自分を看取ってくれるのか？「なかまの会」ができた背景には、さまざまな事情で社会的孤立に陥った自立者の切実な思いがありました。「なかまの会」が大切にしてきた葬儀は、互助会で最も大切な活動として受け継がれています。生前をともに過ごしたなかま、ボランティアが故人をしのび、思い出を語り合います。葬儀には、故人を知らない人も多く参列します。ともに過ごした時がなくても、精一杯生きた人生を、みんなで心に刻みます。

※2020年度 互助会葬：14件 参列者総数：436名



⑥

⑦ 偲ぶ会

「なかまの会」では年に1度、先立ったなかまを追悼する「偲ぶ会」を開いています。互助会となっても毎年欠かさず、続けています。壇上に懐かしい遺影を並べ、一人ひとりの名前と没年を記した「追悼幕」を掲げます。抱樸が支援にかかわり、亡くなった方で引き取り手のなかった自立者の方々も、一緒に追悼しています。現在、追悼幕には200名近い方々のお名前が記されています。

※2020年度開催 10月16日 参加数：58名



⑦



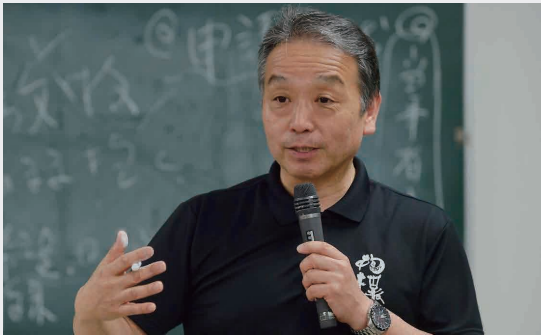
政策提言・周知活動

ホームレスを生まない社会を目指して

私たちは、目の前の方をどう支えるかと共に、ホームレスや孤立の状態にある方を生まない、誰もが生きやすい社会をつくるための活動も行なっています。その一環として、行政への提言活動や広報・周知活動に取り組んでいます。

●政府・行政への提言

抱樸は、困窮・困難な状況の中、自ら助けを求めることのできなかった方々を支援しています。その人たちに代わって社会問題やあるべき支援を国や自治体に提言していくことが、出会った者の責任です。これまでも北九州におけるホームレス支援に関するグランドプランや北九州市への政策提言、全国の支援団体と協力して法整備に関する呼びかけ活動を行なってきました。目の前にいる困っている方への支援とあわせて、社会情勢の把握と提言により、“ひとりも取り残されない社会”を目指します。



撮影：タカオカ邦彦

【2020年度の主な提言活動】

- ・調査研究事業の実施による社会課題の可視化と支援策の提言
- ・国の審議会、委員会や自治体の協議会などへの参加

【2020年度の主な講演会（オンライン開催含む）】

- ・自治体の人権研修会、市民集会
- ・イベントトークゲスト
- ・組合の総会基調講演
- ・大学での講義

●ほうぼくチャンネル

コロナ禍により対面の講演会の中止があいつぎました。そこで「より広い層に抱樸の理念や活動を知ってもらいたい」と、2020年5月にYouTubeで番組配信〈ほうぼくチャンネル〉を開始。2020年度は、茂木健一郎（脳科学者）、村木厚子（元厚生労働事務次官）、亀石倫子（弁護士）らをゲストに招き33番組をお届けしました。奥田理事長と多彩なゲストの対談を中心に、毎月2回の配信を継続的に行なっています。



ほうぼく
YouTubeチャンネル



いきわらいちざ

●生笑一座

理事長の奥田や副理事長の谷本が、野宿経験のあるメンバーと「人生」について語らいながら、ワークショップや歌などを披露する一座です。2013年の結成以来、小中学校を中心に全国で公演を行なってきました。「もう死ぬしかない、と思ったけれど、今、生きていて本当によかった。生きてさええば、笑える日が来る」というメンバーの“本当のことば”は、つらい思いを抱えている子どもたちに響いています。



生笑一座実行委員会
WEBサイト



希望のまちプロジェクト



北九州市の「暗部」を、「共生と福祉」の拠点に

2020年4月28日、NPO法人抱樸は、暴力団工藤会の本部事務所（北九州市小倉北区）の跡地を民間企業から買い受けました（※）。「特定危険指定暴力団」の活動拠点であった地を、子どもや若者を含む全世代が地域で共に生きていくための拠点として再生させる事業を「希望のまちプロジェクト」と名付けました。

この取り組みでは、地域に暮らす方々、子ども、若者、高齢者、生活困窮者、障がい者、生きづらさを抱えた人々が、「その人らしく生きる」ために、「居場所」と「出番」を提供したいと願っています。北九州市の「暗部」と言われた場所を、「共生と福祉」つまり「いのちと希望」の拠点に変えていきます。

※土地購入資金の1億3,000万円は、全額借り入れで行ない、返済はご寄付に頼っています。土地代は、工藤会には一切渡っていません。代金は本部建屋の撤去費及び滞納の固定資産税、また襲撃事件被害者へ賠償金として、北九州市と福岡県暴力追放運動推進センターが運用しました。

●市民参加型の町づくり

「ソーシャルインパクト（社会的影響力）」を持つ「地域共生社会のモデル」であることを多くの人々に伝え、全国的な支援を受けつつ、地域みんなで「希望のまち」を創っていきます。

●新たに「社会福祉法人抱樸」の設立を目指します

「希望のまちプロジェクト」の実施は、これから設立する「社会福祉法人抱樸」が責任をもって担当します。抱樸はこれまで認定NPO法人として活動してきましたが、社会福祉法人を新たに立ち上げ、併設することを目指します。福祉制度の実施に長けた社会福祉法人と、制度によらず柔軟な活動ができるNPO法人、その両方の良さを活かし、どんな状況にある人でも受け入れる、「断らない支援」をさらに押し進めます。

「希望のまちプロジェクト」のメンバー

- 代表：奥田知志（NPO抱樸理事長）
- 顧問：村木厚子（元厚生労働事務次官）
- アドバイザー：田島良昭（最高検察庁参与・長崎南高愛隣会顧問）
- 有識者会議議長：稲月 正（北九州市立大学教授）
- コミュニティデザイン：山崎 亮（Studio-L）
- 設計監修：手塚貴晴・由比（手塚建築研究所）
- ※その他のメンバーについては、今後地域と相談していきます。

▶今後の進行スケジュール

- 2021年度中…借入返済（1億3,000万円）
- 2022年6～8月…社会福祉法人設立申請
- 2023年4月…拠点施設建築開始
- 2024年3月…拠点施設完成（開所目標）

「コロナ緊急 | 家や仕事を失う人をひとりにしない支援」



撮影：タカオカ邦彦

コロナ関連死をくい止めるために、クラウドファンディングに挑戦し「支援付き住宅」を全国展開しました。

2020年4月、コロナ感染拡大を受けて、1回目の緊急事態宣言が発令されました。経済が大打撃を受ける中、そのシワ寄せが最もあらわれるのは、非正規雇用の人や低所得の人など、社会的に弱い立場にいる人たちです。このような人たちからまず仕事を失い、住まいを失い、人とのつながりを失い、いのちの危機に直面することになります。過去20年あまりの間に、アジア通貨危機とリーマンショックという2度の不況の波を経験し、その影響で自殺者とホームレスが増加するという大変厳しい状況が起きました。その過去の経験から、わたしたち抱樸は、次の3つの支援事業を全国の仲間と取り組むことにしました。

- ①全国の支援団体へ感染予防資材を提供
- ②フェイス・トゥ・フェイスの相談事業を諦めないための機材購入費提供
- ③大家さんも安心できる相談員がいる支援付き住宅の持続的提供

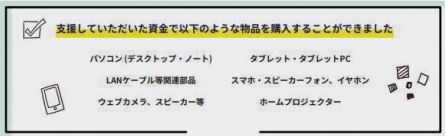


事業は寄付金で行なおうと、2020年4月28日、この支援事業のために全国へ向けて協力の呼びかけを開始しました。記者発表をWEB動画番組サイトのDOMMUNEで行ない、READYFORが運営するプラットフォームでクラウドファンディングをスタートさせました。早々に、村上財団からマッチング寄付をご提案いただき、通常はクラウドファンディング終了後に入金を受けるところ、期間中に資金提供を受けることができました。そのお陰で、早い時点で支援事業に着手することができました。このクラウドファンディングには村上財団からマッチング寄付3,000万円をいただけるという応援もありました。結果、クラウドファンディングでは10,289名の方から115,798,000円が集まり、そのほか直接にも多額の寄付を頂戴しました。

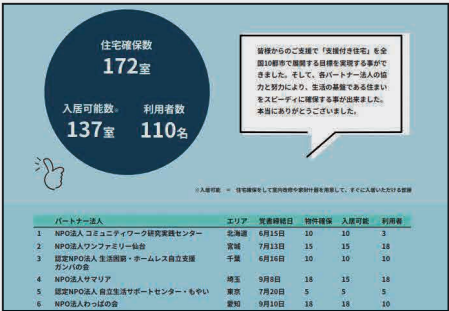
全国の皆様からのご寄付を活用し、支援を実施しました。



①全国の支援団体へ感染予防資材を提供
マスク 132,500枚
消毒用アルコール 160本
全国185団体へ提供



②フェイス・トゥ・フェイスの相談事業を諦めないための機材購入費提供
全国34団体へ 環境整備資金を提供
購入物品：パソコン（デスクトップ・ノート）
タブレット・タブレットPC LAN ケーブル等関連部品
スマホ・スピーカーフォン、イヤホン ウェブカメラ、スピーカー等 ホームプロジェクター



③大家さんも安心できる相談員がいる支援付き住宅の持続的提供
住宅確保数 172室
入居可能数 137室
利用者数 110名
※入居可能＝住宅確保をして室内改修や家財什器を用意して、すぐに入居いただける部屋

「答え」は支援者と被支援者のあいだで生まれる 高橋源一郎×奥田知志

抱樸はなぜ、33年以上も困窮者支援を続けているのか。「伴走型支援」を掲げる理由、そして「抱樸」という名の由来とは――。新型コロナの感染拡大を受けて抱樸が実施したクラウドファンディング最終日、2020年7月27日にDOMMUNEが配信した特別番組「NPO ほうぼくクラウドファンディングファイナル〈路上'20夏〉家を失わない仕組みを全国に」にて行なわれた高橋源一郎（文学者）と奥田知志（当NPO 法人理事長）の対談を採録します。

高橋源一郎（以下、高橋） 今日はお招きいただきありがとうございます。
奥田知志（以下、奥田） こちらこそ光栄です。やっとお会いできました。
高橋 奥田さんの本を何冊か読ませていただいて、すごく自分と似ているところがあると思いました。無茶なところとか、いい加減なところとか（笑）。まず抱樸という名前に惹かれました。「樸」は荒木や原木という意味なんですよ。ゴツゴツした原木を抱きしめると、当然人間は傷つく。抱きしめるという行為は、尊くてすばらしいものだと思いますが、いやいやそんなに生やさしいものじゃない、というのが、この「抱樸」という言葉に現れている。言葉にも敏感な方だなというのが最初の印象でした。
奥田 「抱樸」という言葉に出会ったのは学生の頃でした。『橋のない川』で有名な小説家・住井すゑがエッセイ集のなかで、人権について勉強する「抱樸庵」というスペースを自宅に作っていると書いていて。以来、そこで紹介されていた「抱樸」という言葉がずっと気になっていました。もともとは老子の言葉なんです。ありのまま（自然のまま）生きなさい、という意味合い。だけど、私は牧師でもあるので、キリスト教的な解釈も含めて、3つの意味合いで捉えています。1つ目は「しのごの条件をつけない」、原木のまま出会おうということ。今の社会は、書類が足りないとか、条件をつけて断っているんです。いちばんの典型は、困っているならその本人が申請しないという申請主義。でもいちばん困っているのは自分では申請できない人たちなんですよ。そういうことは退けて出会いましょう、と。
2つ目は、「何のため」や「意味」をあらかじめ確かめないと一緒に生きられないというのはやめようということ。原木ですから、それが将来何になるのかはわからない。

高橋 そうですね。その段階では。
奥田 今の社会では、「これ何のためにあるの?」「これをするに何の意味があるの?」ということのメリットを事前に証明することが求められる。それはいずれわかることであって、初めからはわからないものです。椅子になる人もいれば、楽器になる人もいます。3つ目は、「お互いに傷つく」ということ。人と人の出会い・関わりあいは傷を含んでいると思うんです。それを今の社会は回避している。相模原で起こった障害者施設の事件もそうでしたけれども、大変なことを「不幸」と言ってしまう。大変な人を社会の外に排除しようとする。けど人間はどのみち大変なんじゃないの、と思うんです。大変だけれども面白い、大変だけれど嫌じゃない。そ

ういう社会になったら生きやすいんじゃないかと思って、「抱樸」という言葉を選んだんです。

なぜ30年も抱樸を続けているのか？

高橋 奥田さんが関わられているのは、すごく「大変な」人たち、抱きしめると傷つく人たちですよ。
奥田 そう。
高橋 でも、責務でやっているわけではない。
奥田 いやあ、責務じゃ続かないです。取材の方にも「何でこんなこと30年もやっているんですか?」とよく訊かれるんです。みんな理由を知りたがる。原点になる出会いがあった、とか、実は親がホームレスだった、とか。
高橋 それだと人は納得するんですよ。
奥田 新聞記者はそういう物語が聞きたい。けど、理由がないとやっただめなのよ、と思うんです。この頃は「逃げ遅れたんだよ」と言うようにしています。本当はもうちょっと早く逃げたらよかったのに、30年以上活動が続けていて気づいたら、逃げ遅れていた（笑）。けど本当は、面白かったんですよ。面白いからやったんじゃない、やってみたら面白かった。エンパワーメントされていくんです。そういう場所に身を置くというのは生きていて、とってもいいなと。いや、めんどくさいですよ。でも結果として面白かった。
高橋 「大変な」人たちは一般的とは違う考え方、感じ方で生きていて、マジョリティーに新しい視座を教えてくれる。奥田さんは茂木健一郎さんとの対談で、「弱者こそ次代の花形」と書かれていましたよね。太古の昔から、いちばん強い連中がいちばんいい場所を占めていた。しょうがないから弱い連中は端っこで生きる。海では弱い連中は、海岸のほうへ行かざるを得なくて、そこでも追い詰められるから、結果的に陸に上がって両生類になる。追い込まれているのは、いつも弱くてダメなやつ。でもその連中が進化の鍵を握っている。
奥田 その話は教育学者・林竹二の『教育の再生をもとめて』に入っている、ある定時制高校でした「創世紀」という授業に出てくるんで

す。追い詰められたものたちが、追い詰められた拳句、次の進化を遂げる。いちばんいいところで胡座をかいているやつは変わらないんですよ。排除されたものたちから、進化へのパワーが生まれる。「次代の花形」になるのは追い詰められた連中なんです。

「答え」はあいに生まれる

奥田 学生時代、釜ヶ崎に入り浸っていたんですが、そのとき派遣法ができたんです。85年ですね。当時は対象となる業種も通訳とか、どちらかと言えば、高給取りの専門職に限られていました。ただ、当時すでに釜ヶ崎の日雇い労働者たちは、チラシを配って派遣法の反対運動をしていた。全国が「寄せ場」化する、大勢が日雇い労働者化すると警告していたんです。労働者を切り売りしていく仕組みだと。僕は当時、この人たちが法律読んでないな、と思ってたんですけど、あれから30年経って、派遣切りで全国の人が日雇い労働者化している。労働人口の4割、2000万人が非正規雇用ですよ。釜ヶ崎のおじさんたちには、先見の明があった。そういう人たちの声を聞くことで、次の時代が見えてくる。

高橋 感受性が鋭いということですよ。以前、「弱さ」の研究のために、全国のいろんな施設を周っていた時に、重度の心身障害を持つ人たちが暮らしている施設に行ったんです。その施設には、通常そういう施設にあるマニュアルがないんです。それで何をやるかといったら、働いている人は黙って耳を澄ませているんですよ。その人たちが、何を求めているかわかるまでずっと。1時間くらいしてやっと一言、「日向ぼっこしたい」とこぼす。それまで、ずっと耳を澄ましているんです。これ何分待つかが決まっているんですか、と尋ねると、「決まっています」と答えるわけです。

こういう難しい状態の人を見ている施設には共通点があるんです。マニュアルがなく、時間が無制限。納得いくまで何時間でもやる（笑）。今の社会では、介護でも何でも時間で区切ってやるシステムになってしまっている。本当はそれだと無理なんですよ。僕らにはマニュアルがあったほうが誰でもできて効率的だという刷り込みがある。だけど、端っこまで行ってみてそこから社会全体を見返すと、自分たちがこれまで教わってきたやり方がおかしいと気づく。

奥田 今の話はひょっとすると、求めているものを聞いているんじゃないかと、作っているのかもしれないと思いました。抱樸のやっている「伴走型支援」では、答えはあいに生まれる、という考え方をしているんです。従来の問題解決型の支援は、専門家が答えを与えるか、本人が主体的に答えを選ぶ。けど孤立している人は、自分の状態がわからなかったりするんですよ。最初からその人が答えを持っていたんじゃないかと、人との触れ合いのなかで、耳を傾け／傾けられているなかで、「今日は日向ぼっこしたいな」とそのとき初めて思ったのかもしれない。支援者と被支援者のあいで答えが生まれた。そんな場面だったのかもしれない。

真の生産性＝その人が その人として自己実現できること

高橋 要するに支援対象じゃないんですよ。支援対象とした時点で、もうモノとして扱っている。だからマニュアルがある。

奥田 マニュアルは思考停止ですよ。取り扱い説明書ですから。

高橋 だけど、人間というのは取扱説明書では扱えないはずなんです。

福岡に認知症の老人たちが暮らしている〈宅老所よりあい〉という施設があります。一般的に、認知症の人は手間がかかるということで時間を決めてご飯を食べさせるんです（時間がかかるから最後は無理やり口に押し込む）。でも〈宅老所〉では、ご飯を自分で食べてもらうんです。1時間ほどかかって、そのあいだずっと付き添っていきなさいいけないから大変ですよ。でもそういうふうにしていくと治っていくんですよ。〈宅老所〉に行くようになって、「老い」や「死」を考え直したんです。「老い」や「死」はできるだけ避けたい、見たくない。だから、みんな病院や施設に老人や病人を預けて遠ざける。預けられた人たちはそこでマニュアル通り扱われる。それが今の社会です。〈宅老所〉は、老いも死も認める。だから認知症も認めるんです。でね、「なってみると楽しいよ」と言うんです（笑）。仲良くなった80歳くらいのお婆さんに寂しいですかと訊くと、「寂しくない。お母さんもお姉ちゃんもみんないるから」と言うんです。つまり老いや死、孤独になっていくことを全部受け入れていくと、みんな穏やかで元気になっていく。だから元気に死んでいく。これは人間のあり方をきちんと見て、最後まで伴走していくと、人間は愛おしい存在なんだとわかっていくということだと思えます。

いちばんびっくりしたのは近所との関係。〈宅老所〉ができたばかりの頃は、反対運動が起こったらしいんです。ところが、認知症の老人たちが元気になっていく姿を見て、徐々に近所に住んでいる人たちも協力的になっていき、最終的には「次は自分も入りたい」と言う人が続出した。収容してマニュアル通りに扱うというやり方をしなかった結果、逆に弱者の世界を外に広げた、社会を宅老所化していったんです。

奥田 私もよく使う言葉ですが、「支援」は、言外に「あんた、それじゃダメだよ」と言い切っている言葉だと思うんです。そうじゃなくて、老いていようが、認知症が出ていようが、その人がその人として自己実現できることが目指すべきあり方です。今「支援」の世界がそこからだんだん離れていっている。でも真の生産性は、その人がその人として自己実現できるということ。本当に生産性のある社会というのは、その人がその人として自己実現できる社会だと思うんです。「生産性」というと、みんなお金のことばかり言うんだけど。

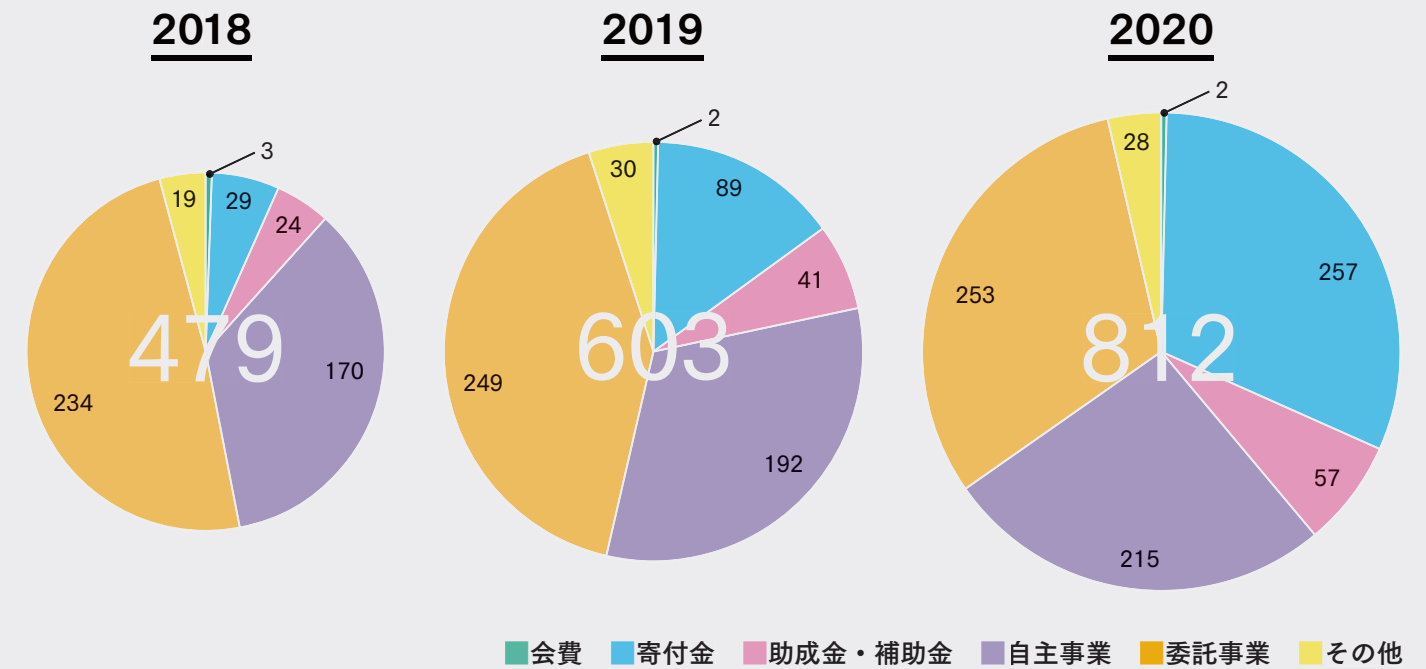


text Sogo Hiraiwa
photography Jun Yokoyama
special thanks DOMMUNE

会計報告

【収入】

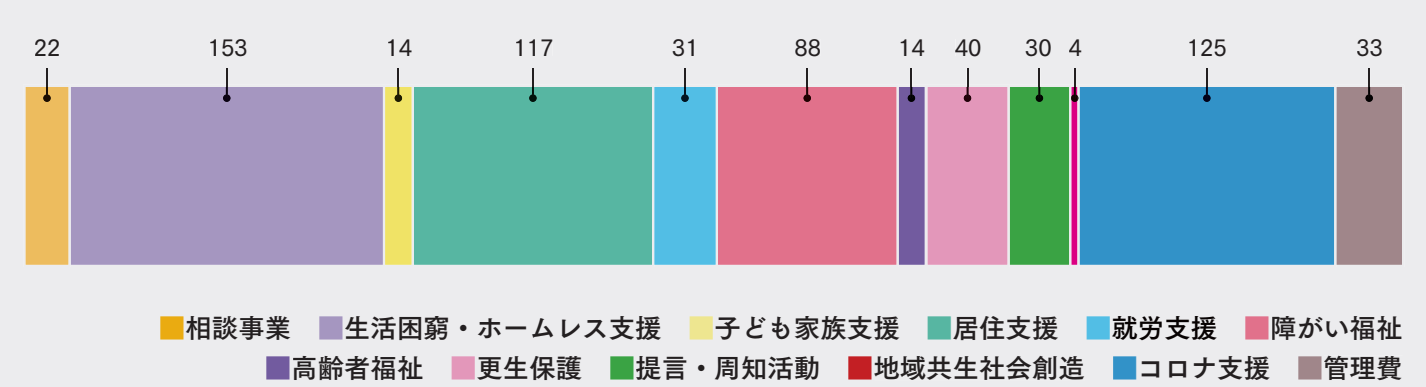
単位：百万円



- ・2020年度は、収益総額が8億1,200万円でした（前年度比1.34倍）。
- ・そのうち、寄付金収益が大きく伸びています（前年度比2.88倍）。これは、コロナ禍での住宅支援のためのクラウドファンディングが約1億1,500万円、また村上財団からのマッチング寄付3,000万円等、コロナ禍の支援のための寄付が多く寄せられたことによります。また、社会福祉法人設立のための寄付も1,300万円が寄せられました。コロナ関連でいただいた寄付のうち、合計1億4,500万円は全国の支援団体の活動のために助成しました。
- ・抱樸の「ひとりにしない」という支援、断らない支援のためには、制度事業、委託事業と抱樸独自の自主事業を組み合わせることが必要です。そのためには、寄付が大きな意義を持ちます。全国から寄せられた支援に感謝申し上げます。

【支出】

単位：百万円



- ・2020年度は、支出総額が6億7,000万円でした。
- ・2020年度は、コロナ禍の支援事業のための支出があらたに発生しました。
- ・生活困窮者・ホームレス支援に続いて、居住支援事業が伸びています。

法人賛助会員のみなさま

株式会社 l'mbesideyou

株式会社 九州エムアイ通信

株式会社 サンキュードラッグ

株式会社 サンレー

株式会社 清栄

宗教法人 専念寺

大和証券 株式会社

手作りおやつ工房とさか

株式会社 ひまわり

株式会社 松波〈大邸（テグ）食堂〉

株式会社 山猫総合研究所

* 2021 年 11 月 29 日 時点

応援 メッセージ



平野健二（株式会社サンキュードラッグ代表取締役社長兼 CEO）
誰か自分以外の人を助けたら、まずは家族のことを思い浮かべるでしょう。その家族が崩壊している家庭があるとしたら、社会は真っ先に手を差し伸べるべきではないでしょうか。格差、貧困、育児放棄……原因はさまざまですが、まずは前に向いて歩みだす人を支えることに、勇気と希望を差し上げたいものです。



佐久間庸和（株式会社サンレー代表取締役社長）
抱樸はこれまでの「問題解決型支援」に加えて、つながり続ける「伴走型支援」へと活動の幅を広げてくれました。これはまさに“隣人愛”の実践であり、弊社が経営理念として掲げてきた“人間尊重”にも通じていると思います。今後も有縁社会の実現を目指して、同志として共に歩んでまいりましょう！



青野慶久（サイボウス株式会社代表取締役社長）
生活困窮を自己責任にすることなく、社会で役割分担して支え合う活動に共感し、サポーターとして抱樸さんの活動を支援させていただいております。これからの社会においては、動きの遅い政治に期待し過ぎることなく、一人ひとりが主体的に行動することが大切だと考えています。みなさまもぜひ！



雨宮処凛（作家／活動家）
自分自身、支援活動をしながらも、本当に自分が困ったときに「助けて」と言えるかと問えば、そのハードルの高さに身がすくむ。だけど、なぜか奥田さんには言える気がしていて、そういう安心感が、みんなにとっての抱樸なのだと思う。助け合いの実践を、ともに広げていきましょう。



石原海（映像作家／ボランティア）
いままで訪れた場所でいちばんパンチの効いてた場所が抱樸の花見でした。花が散ったあとの桜なき緑に囲まれて「花見」と呼ぶその日の熱狂と愛と、そこにいる人々の存在に痺れました。そして、気づいたらアタシは北九州に引っ越していました。抱樸の活動を目撃し続けなければいけないと思ったからです。大好き抱樸、がんばれ抱樸！これからもずっと関わらせてください。



コムアイ（アーティスト）
正義と悪を決めて取り締まるようなやり方ではなく、どんな人も、誰ひとりとしてこぼれ落ちないように、やさしく強く、包み込む。日本は包容力のある社会だって自信をもって言える、そういう未来のために、抱樸の挑戦は大切な一歩です。日々のなかでそれを継続されていること、尊敬の眼差しで見つめています。



永井玲衣（哲学研究者）
わたしは抱樸のサポーターであることが、とてもうれしいです。それは、この生きづらく、疲れ果てた社会を、抱樸が変えようとしているからです。一人ひとりに丁寧に向き合いながら、壊れた社会の流れに抗おうとしているからです。あなたと一緒に、抱樸を支えたいです。ここからこそ、社会が変わると信じています。



みたらし加奈（臨床心理士）
命を脅かす“孤独”が訪れたとき、差し伸べられた手を掴むことは難しい。呑み込んでしまった「助けて」や、やっと言葉にできた「助けて」に正面から向き合い続ける姿勢は、生半可な気持ちではできないことではない。抱樸の背中を見ながら、「助けて」と言える社会のために、自分に何ができるのかを問い続けている。そしてこれからも抱樸の活動を応援している。



村木厚子（元厚生事務次官／伊藤忠商事社外取締役）
これまで抱樸は、困難を抱えた人々に寄り添い、「私たちがそばにいるよ」と声をかけ続けてきました。抱樸がそうした活動が続けることができたのは、抱樸を応援してくださる応援団がいたからです。コロナで困難を抱える人は増えましたが、抱樸の応援団も大きくなりました。その力を得て、さらにいい仕事をしてください。



茂木健一郎（脳科学者）
誰もが、その場所に追いやられ、その立場になる可能性がある。だから、手を差し延べることは、未来の自分、あるいはそうなったかもしれない自分を助けること。奥田知志さんとは 20 年以上のお付き合いとなりました。奥田さんの他助と自助の人間どまんなかの伝言に全面共感。

抱樸をサポートするための3つの方法

抱樸の活動は、みなさまのご寄付によって支えられています。
支援を必要としている方々に届けるため、ぜひ財政的なご支援をお願いいたします。

①ほうぼくサポーター

抱樸では、毎月定期的なご寄付をくださる「ほうぼくサポーター」を募集しています。初回のクレジットカード登録で、毎月定額の支援が可能です。
サポーターのみなさんには月1回、活動報告や支援現場の声をお届けする、読み応えのあるメールマガジン『ほうぼくサポーターかわら版』をお送りします。

②1,000円からの寄付

抱樸の活動は、皆様からのご寄付によって支えられています。
1,000円からできる寄付を用意しております。

1,000円で



炊き出し3人分のお弁当を用意できます！

5,000円で



子どもたちに学習支援を1度行なうことができます！

10,000円で



住まいを手配し、新しい生活のスタートを支えられます！

③遺言による寄付／相続財産からの寄付

わたしたちの活動は、他人同士が出会って、知り合って、支え合う「仕組み」をつくる活動です。「財産の一部を社会のために遣ってもらいたい」「遺産を相続したが、一部を寄付したい」——そのような想いを抱樸は受け止め、支援につなげていきます。しんどい状況に陥った人も、再び誰かと微笑み合える、そんな暮らしを、あなたの手で支えていただけないでしょうか。

ほうぼくサポーターやご寄付にご興味がある方は、右記のQRコードまたは抱樸HPをご覧ください。クレジットカード決済のほか、郵便振替でも支援いただけます。「ひとりにしない」社会を一緒につくっていきましょう。

寄付ページ▶
www.houboku.net/webdonation



抱樸に参加するための3つの方法

①ボランティアとして参加する

抱樸では、炊き出しやパトロールをはじめとした、さまざまな活動へのボランティアを募集しています。お弁当づくり、炊き出し運営、パトロールといった活動に、遠方から参加される方々もいます。また、さまざまな事情で学校や塾へ通うのが難しい小中高校生の子どもたちに、勉強を教える大学生ボランティアも募集中です。（NPO 正会員になると、個人情報の守秘義務に誓約のうえ、個々人に寄り添う活動にもご参加いただけます）

②「互助会」に入る

互助会は、誰でも参加可能な会員制の共同体グループです。月500円の会費で、イベントへの特待参加、入院見舞金や長寿のお祝いが受けられ、互助会葬も出すことができます。ここでは、「支援する人／支援される人」という線引きはありません。「おんなじいのち」の取り組みに参加するため、遠方にお住まいの方も多くいらっしゃいます。いつでも、どなたでも歓迎します。

③一緒に働く

抱樸では一緒に働く仲間を募集しています。フルタイムからパートタイムの仕事まで様々な仕事があります。ご応募の際はお電話でご連絡のうえ、履歴書をご送付ください。

お問い合わせ先
Tel: 093-653-0779
Fax: 093-653-0779
E-mail: npo@houboku.net

ボランティアや
求人募集については、
右記のQRコード
または
抱樸HPをご覧ください。

抱樸ボランティアページ▶
www.houboku.net/volunteer/



事業所一覧

NPO 法人 抱樸（代表）
〒805-0015
福岡県北九州市八幡東区荒生田2-1-32
Tel: 093-653-0779
Fax: 093-653-0779
E-mail: npo@houboku.net

ホームレス自立支援センター北九州
〒803-0811
福岡県北九州市小倉北区大門1-6-48
Tel: 093-563-3069
Fax: 093-581-3566
巡回相談 Tel: 093-571-1304

抱樸館北九州
〒805-0027
福岡県北九州市八幡東区東鉄町7-11
（デイサービスセンター抱樸 併設）
Tel: 093-883-7708
Fax: 093-883-7705

多機能型事業所ほうぼく（抱樸）
〒803-0811
福岡県北九州市小倉北区大門1-4-5-2階
Tel/Fax: 093-581-0901

ほうぼく第2作業所
〒802-0084
福岡県北九州市小倉北区香春口2-6-1-2階
Tel: 093-967-8995
Tel: 093-967-8996

グループホームほうぼく
〒802-0064
福岡県北九州市小倉北区片野4-15-13
ロイヤルプラザ 1階
Tel/Fax: 093-923-0845

中間市市民生活相談センター
〒809-0034
福岡県中間市中間2-10-1
Tel/Fax: 093-246-1030

情報発信

SNSでも随時情報発信をしています。フォローや拡散のご協力をお願いいたします。

YouTube 

Twitter @npohouboku

Facebook @npohouboku

note https://note.com/npohouboku

抱樸かわら版DX(デラックス)
2021 vol.1

編集：江田初穂（抱樸）
谷瀬未紀（抱樸）
平岩壮悟

デザイン：千原航
発行日：2021年12月25日
発行者：認定NPO法人 抱樸
〒805-0015
福岡県北九州市八幡東区
荒生田2-1-32

